

内政優位の政治と国際関係

—アメリカ・日本・中国

東京大学大学院法学政治学研究科教授

藤原 帰一

- * 近代国際政治の始まり
- * 世論と政治、外交
- * 文民は戦争に消極的か
- * 平和利用の核開発？
- * 強硬姿勢の背景
- * はき違えた議論
- * アメリカには々々非々々で
- * 領土は国際法で合意
- * 一枚岩ではない中国
- * 本場の世論なのか



浅野 それでは開会いたします。（拍手）

今日は藤原帰一先生においでいただきました。

もうおなじみなので改めてご紹介はしませんけれども、国際政治の状況がこれだけわからない時代もないし、これからどうなるか興味の尽きないところですが、今日はアメリカと日本と中国に絞ってお話くださるということですよ。ヨーロッパは今日ちょっと脇役になって、来月、浜先生にお願いしようかと思えます。

今日はレジュメに『これは映画だ！』という

映画の本を割引でお売りすると書いていたんですけれども、残念ながら手配が間に合わなかったの来週にでも買っていたかと思いますが、今日は映画の話は出そうもないので残念ですが、ご容赦いただきたいと思えます。それで

は藤原さん、よろしくお願いいたします。（拍手）

藤原 ご紹介にあずかりました藤原でございます。映画のお話ではなくて申し訳ございません。実は『AERA』での映画のコラムをつい先々週終えました。自分の意思によってやめたというわけではなかったのですけれども、これで逃げ場がなくなりました。これまではしなればいけない仕事が多ければたまるほど映画を見るという人生を送ってきました。

経済倶楽部ではすばらしい映画鑑賞会をしていらっしやうって、「Driving Miss Daisy」とか、「ムッソリーニとお茶を」とか「フライド・グリーン・トマト」が上映されているのはうれしいです。それから「グラディエーター」はアクシ